

水産の窓

まき網によるサバ類の漁況と秋漁の予測

8 - No. 14

令和8年9月18日

茨城県水産試験場

1. 水揚量の推移と資源状況について

三陸～房総沖を主漁場とする北部まき網による近年のサバ類水揚量は、H19年以降15万トン前後で推移していました。その後、H25年の高水準な加入により25万トン前後に増加し、H28年は30.7万トンに達しましたが、H29年からは減少傾向となっています。特にR4年以降は、加入尾数が減少し、水揚量は10万トンを下回る記録的な不漁が続いており、R7年の水揚量は1.1万トンと過去最低となりました（図1）。

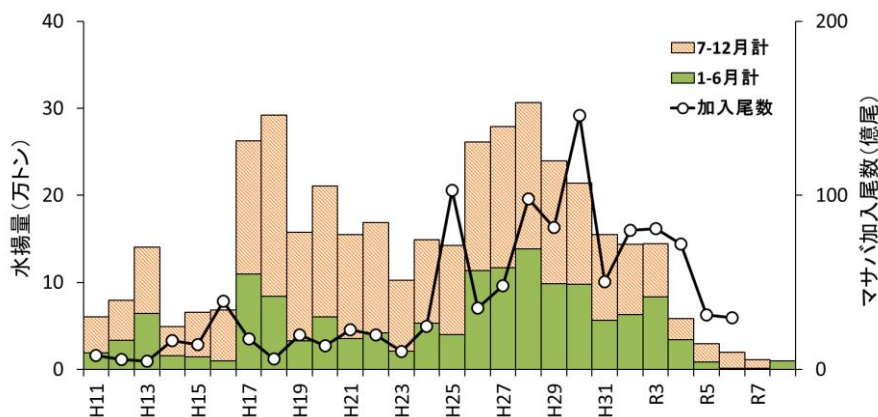


図1 北部まき網サバ類水揚量とマサバ資源加入尾数
(令和8年水揚量は7月分まで)

2. 近年の不漁について

近年のまき網の不漁の要因として資源量の減少のほか、北からの冷たい親潮が弱まっていることや、R4年秋以降、南からの暖かい黒潮続流が三陸沖まで北偏したこと等の海洋環境の変化が挙げられます。これらの影響等により、マサバが道東沖から漁場となる三陸～常磐沖へ回遊する時期の遅れや、漁期が短縮していると推測されます。

また、R8年1～6月の水揚量は一時的に増えたものの、国の研究機関による沖合域での調査の結果、R8年のマサバ加入量は近年の平均を大きく下回る水準と見込まれ、サバ類の漁獲が前年に比べ大きく増加することは考えにくい状況です。

3. 秋漁の漁況予測

今年秋漁（9～12月）のまき網漁場は水温環境等を考慮し、10月までは道東～三陸南部海域、11・12月は三陸北部海域～犬吠埼沖に主に形成されると予測されます。市場調査での体長組成や年齢査定の結果から、漁獲される魚体は、マサバ体長20～33cm（1・2歳魚、75～400g）を主体に、27～35cm（3～5歳魚、200～480g）も漁獲される見込みです。

4. 今後の課題

R7年に気象庁より7年9か月継続した黒潮大蛇行が終息したとの発表があり、R7・8年は春季～初夏に親潮系冷水の南下が見られるなど海洋環境に変化が生じています。今後、サバ類資源がどのような影響を受けるか調査・研究していくことが重要と考えています。

（回遊性資源部 三浦）